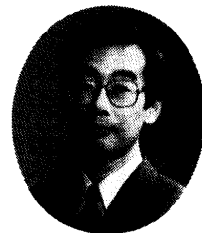


## 巻頭言



## ソフトウェアの時代は終わった

村岡 洋一†



タイトルをご覧になった読者は、何を馬鹿なことを言っているんだと思われた方がほとんどであろう。まあ、そのとおり。でも、多少は、馬鹿なタイトルでもつけないと、そもそも巻頭言などお読みいただけまい。

これからは、学会としてももっと応用に目を広げていこうというのが、本当の主旨である。

これまで、当学会でもコンピュータサイエンスとしては、どうしてもコンピュータハードウェアまたはいわゆるシステムソフトウェアなど、コンピュータを作る人のための技術が中心であった傾向があることは否めまい。

例えば、今話題の一つとなっている並列処理を取り上げてみても、キャッシュコヒーレンスやネットワークなどのハードウェア技術や、並列化コンパイラや並列オブジェクト指向などのソフトウェアの素晴らしい技術が開花しつつある。

もちろん、これはこれで面白い話題が沢山あって、どんどん研究と開発を進めていけばいいわけであるが、これらに合せて是非素晴らしい応用の技術ももっと開花して欲しいと思うのは、私ばかりではないであろう。

想像力のあまりない私ではあるものの、並列処理のものすごい処理能力(と合せて、コンピュータ以外の諸々の技術)があれば、例えば：

- 実時間での気象(例：トーンード)の制御
- お茶の間での「勝手きままな火星探検」
- ロシアの経済計画作成
- 渋滞0の交通制御

などの新しい応用が開けよう。

もちろん、より知見の広い読者はもっともっと面白い。コンピュータと実世界が一つに統合された(それこそ本当の Real World Computing としての)応用を考えつかれよう。

これまで、「ソフトウェアの時代」といったときに、ソフトウェアを「どう(how)」作るかが話題の中心で、「何(what)」を作るかの議論は少なかった。もちろんこれから、これまでのコンピュータサイエンスにおいて中心であったような、ハードウェアや(「how」の面からの)ソフトウェア技術が大切であることはいうまでもない。

しかし、これからはこのような技術の研究に加えて、「何を」という応用技術面からの研究の展開およびそれらに関する成果の発表を、当学会としても大切にしていって時代ではなからうか。

定量的なデータを調べたことはないので、あまり確としたことは言えないが、恐らく情報処理学会としても、会員の大多数はコンピュータを作る側というよりも、システム開発も含めて使う側なのではないだろうか。

そのような会員の人の役に立つ学会とするためにも、これまで以上に応用に力を入れた学会に展開する必要があると考える。学会誌にももっとも新しい応用の記事を増やすこともいいであろう。また、論文誌としてももっと応用の成果の発表を期待したい。もし、今の論文誌がそのような発表の場としてはふさわしくないのであれば、新しい場を作ってもいいのではないか。

コンピュータ関連の教育の場としても、これまでのコンピュータサイエンスに加えて、利用面からのインタフェーションサイエンスの教育が叫ばれている。

さらには、嘘か本当かはしらないが、最近コンピュータ業界は構造不況だということを言う人もいようだ。もしそうだとすれば、ますます新しい応用を展開させることは、この学会の急務ではなからうか。さもなければ、会員全ての明日はない！

(平成4年10月2日)

† 本会理事 早稲田大学